

頭 中 将 論

—その人物像の変貌と主題との関連性—

武 原 弘

一

光源氏を主人公とする源氏物語第一部・第二部において、終始その脇役として活躍する頭中将は、確かに重要な存在である。しかし彼に対するこれまでの評価は、ややもすれば皮相な過小評価に陥りがちであって、論の数としても必ずしも多くはないようである。それは脇役の彼にとつては避けがたい宿命とも言えるのであろうが、限界を越えた過大評価が不当であるのと同じ意味において、従来の中中将論には再評価を要する部分もかなり残されているように私には思われる。

頭中将論においてしばしば重要な課題となるのは、彼の人物像の変貌の問題である。それが物語の主題との関わりにおいてどう解釈されるべきかが次に問われてくる課題である。彼は、光源氏と密接な関係が続ける形において物語の主題と深く関わりながらも、物語の進行や場面の変化に応じてたえず自らの人物像の変貌を要請されているからである。脇役である彼の最も正当な評価は、おそらくそのような二つの視点の交点において成り立つはずである。一方にお

頭中将論 —その人物像の変貌と主題との関連性—

いて彼には彼固有の人物像が賦与されながら、他方において主人公や主題に対応して変貌を余儀なくされるという、彼の存在の位相そのものが多面的かつ動的なものとして位置づけられている以上、頭中将論は自ずから多面的な問題を内包せざるを得ないわけで、単純な肯定も否定も無効である。先学の諸論に導かれつつ、小論を試みよう。

二

「傲慢と性急を基調とする」(沢田正子氏)⁽³⁾ 頭中将の性格については、既に諸氏による一致した見解があるのだが、いま問題点を明確化するためにも、私なりに本文を辿りつつその人物像のあらましをとらえておきたい。

頭中将は、今を時めく左大臣の嫡男で、同じ官腹の妹葵上の婿君となつた光源氏と相對する、右大臣家の婿君として物語に登場する(桐壺)。そのころ光源氏は「名のみことくしう、言ひ消たれ給ふ咎おほかなる」、世に評判の高い「好色者」であつたが、その源氏に「親しくなれ聞え給ひて、あそび・たはぶれをも、人よりは、

心やすく、なれ／＼しくふるま」う頭中将もまた、源氏と並んで當代貴族界を代表する「すぎがましきあだ人」であった。二人は「夜屋、学問をもあそびをも、もろともにして、をさ／＼たち後れず、

(中略)心のうちに思ふことをも、かくしあへずなむ、陸れきこえ給ふ」仲で、いわば竹馬の友なのである。雨夜の品定めにおける両者の語らひには親友同志のしみじみとした心の交流がよく表わされている。「女の、これはしもと、難つくまじきは、難くもあるかなと、やう／＼なん、見給へ知る」と語り起こして源氏に恋の指南を授けている場面は、「好色者」中将の人物像が早くもその原質を現わしはじめたものと読みてよからう。物語がさらに展開して、琵琶の名手末摘花を競い合ったり(末摘花)、好色な老女源内侍を中に置いて奇態な恋の轡当て騒動を演じたりして(紅葉賀)、両者いづれ劣らぬ「好色者」同志としてそれぞれの人物像はきわめて生き／＼と豊かに造型されていくが、この場面の後に「この中将は、更に、おし消たれ聞えじと、はかなきことにつけても、思ひ挑み聞え給ふ」(紅葉賀)との叙述があつて、頭中将の源氏に対する異常な対抗意識を強調しながらも、作者は続いて本文に「この御中どのいどみこそ、怪しかりしか。されど、うるさくてなむ」という草子地を用いて詳細を省いている。この「思ひ挑み」こそ頭中将の人物像をその根本から規定する性情なのであるが、おそらく意識的に作者はその詳しい描写を省いたのであろう。この段階での「いどみ」が「はかなきこと」につけてのものであつたからである。いづれにしても、頭中将の内部には源氏に対する親愛感と対抗心という相反する心情が共存しており、その微妙なバランスの上に両者の関

係が維持されていることは確実であり、そのバランスが今後どのような發展を遂げるかという興味からも頭中将は読者にとって注目され得る人物となつていたのである。この関係は以後も長く続き、源氏の不遇時代を描いた賢木巻・須磨巻にも、韻塞ぎを競つたり(賢木)、遠い辺郷に流浪する源氏を慰問し和歌を唱和したり(須磨)する頭中将が描かれている。これらの場面にも「いにしへも、物狂ほしきまで、いどみ聞え給ひしを、思し出でて、かたみに、今も、はかなき事につけつゝ、さすがに、いどみ給」う中将の人物像は明瞭なのだが、これは広義の「好色者」の人物として規定され得よう。源氏も頭中将も「色好み」という共通の世界にあつて、あるいは対抗しあるいは和合してきているのである。ところが、物語が濡標巻に入ると、物語世界の内部にまで政治の波動が深く伝わってきたはじめ、それは物語の主題や構想全体にまで影響を及ぼすほどなのである。伊藤博氏の説かれる「物語世界の変容」である。この変容の兆候は既に賢木巻などにも見えてはいたが、今やそれが明瞭な相貌を示すものとして顕現しはじめたと言つてよからう。しばしば指摘されることだが、頭中将の人物像が顕著な相貌を示しはじめたのもこの巻から総合巻にかけてである。まず、今は権中納言に昇進した彼は、正妻四の君腹の娘を冷泉帝に入内させることに成功した。弘徽殿女御と称されている。帝寵を得れば将来の皇后位も望み得るとすれば、娘の入内は彼にとって権勢拡大の貴重な契機であつた。しかし、源氏と藤壺を後援者とする前斎宮の入内が決定したとき、彼の策謀は確実に挫折した。「思ふ心のありて、きこえ給ひけるに、かくまひ給ひて、御むすめに、きしろふさまにて

さぶらひ給ふを、かた／＼安からず」(絵合) 思う権中納言であつた。冷泉帝が絵に興味を持たれると聞くと、「あくまでかど／＼しく、今めき給へる御心にて、我、人に劣りなむやおぼし励」(絵合) んで、彼は急遽時の名絵師を集めて描かせたり、それを出し惜しみするようにして帝に秘したりして源氏から「猶、権中納言の御心の若／＼しきこそ、改まりがたかめれ」(同上)と痛烈に批評されているが、一応は前齊宮梅壺女御と弘徽殿女御との対抗という形をとった源氏と権中納言の政治的権力をめぐる対立抗争は既に露わである。両者の対抗が一つの頂点を迎えるのは帝前に催された絵合わけの競技である。源氏が須磨に退居中に描いた数々の絵日記によって勝敗は左方梅壺女御の勝利と決せられ、完敗を喫した権中納言は「おぼえ、おさるべきにやと、心やましよう思さる」(同上)のであつた。このように、異常なまでの対抗意識をむき出しにして源氏に挑戦する権中納言の言動は、作者からも相当に批判的嘲笑的に描き出されており、所詮は敗者であり劣者でしかあり得ない彼の人物像が明瞭に浮き彫りされている。この点に触れて森一郎氏は、「『頭中將』を描く作者の態度は敵役を描くそれ」であり、権中納言が「子供っぽく軽々しい人物として、カリカチュライズされている」と評されたのは正鵠を得ている。少くとも須磨巻までの頭中將の人物像とはかなり著しく変貌していると考えざるを得ない。乙女巻で、彼の人物像は新たな相貌を加えつつさらに造型を深くする。ここでまた彼の政治的策謀がある。娘雲井雁を東宮妃の候補として入内させようとする彼の後宮政策であつたが、源氏の娘明石姫君が再び強敵として存在する。加えて、夕霧と雲井雁の幼な恋を知らされて

彼の政治的野望はまたも挫折の憂き目を見るという次第である。権勢に執着している内大臣(かつての頭中將)には、若い二人の清純無垢な初恋も許しがたい障碍にほかならない。彼の「ねたし」と思う気持は「御心動きて、少し雄々しく、あざやきたる御心には、しづめがたし」(乙女)とまで昂まっている。彼は思い余つて積る憤懣を母の大宮に放ち、一方では雲井雁を直ちに大宮邸から自邸に移して厳しい監視下におくのである。その態度は傲慢一徹と評すほかないもので、大宮をして「昔にかはる事のみまさりゆくに、命ながらさも恨めしきに」(乙女)と悲歎せしめるに足るものであつた。「なべての人にはあらずと、世の人も、めで言ふ」(乙女) 政治界の実力者内大臣の、隠された反面が露呈しているのである。更に、常夏巻以降の諸巻には、源氏の養女玉鬘に対抗させるべく探し出した妾腹の娘近江君の物語が描かれているが、無教養で不作法な近江君が世間の笑いとされていふのと対応するように、彼内大臣の人物像もますます否定的批判的に描き出されてきている。この巻あたりから作者は内大臣の人物像に対する源氏の批判的評言をくり返し叙して、相も変らず挫折と敗北を重ねる内大臣の、敗者・劣者としてのイメージを強調するかの如くである。たとえば次の如き叙述に注目したい。「いと、ものきら／＼しく、かひある所つき給へる人にてよし悪しきげぢめもげざやかに、もてはやしました、もて消ち軽むることも、人に異なる大臣なれば」(常夏)「いと、きは／＼しくものしたまふあまりに、深き心をも尋ねず、もて出でて、心にもかかはねば、かく、はしたなきなるべし。よろづのこと、もてなしながらにこそ、なだらかなる物なめれ」(篝火)「人がら、あやしう花や

かに、を、しきかたによりて、親などの御孝をも、いかめしきさまをばたて、人にも見驚かさむの心あり、まことにしみて、深きところはなき人なん、ものせられける」(野分)。いずれも内大臣の性格上の欠点を痛烈に批判する源氏のことばである。これらはまた源氏の口を借りた作者自身の内大臣評でもあらうから、内大臣はまさしく「悪意のある目で見られてゐる」(森氏⁶⁾)のかも知れない。派手で、見栄坊で、思慮が浅く、頑固で性急な、いわば直情径行型の人物ということになるであらう。なお、第二部に入つても、太政大臣にまで栄達を極めた彼の政治家としての人物像は一貫してゐるがそれでも後半の柏木巻に至つて、わが子柏木の急逝に直面したときの哀傷憔悴の様はきわだつた印象を与えるものである。「ふりがたう情けなる御かたち、いと、やせ衰へて、御罷なども、とりつくろひ給はねば、しげりて、親の孝より、けに、やつれ給へり」「ただ降りに降り落ちて、えとどめ給はず、(中略)いとどしう、春雨か

と見ゆるまで、軒の霽に異ならず、ぬらし添へ給ふ」(柏木)などの叙述は、その誇大な表現において彼にふさわしいにちがいないが致仕大臣という政治家には異様なものである。彼はここでも柏木を主役とした脇役の存在でしかないのである。以上、簡略ながら、頭中将の人物像について、場面の變化に應じての変貌の像を中心に概観した。問題はどのような彼の人物像の造型及びその変貌を物語の主題との関わりにおいてどうとらえていくかという点にある。頭中将について、特に源氏との関係という点に論点を限定して考察してみよう。

三

思うに、源氏物語における作中人物像の変貌という問題は特に頭中将に限つたことではない。物語の主要作中人物、たとえば光源氏や藤壺、紫上や柏木などの諸人物についてもそのことはしばしば指摘されてゐる。いわば、源氏物語作中人物論における中心的課題なのである。頭中将の人物像が、いつ、どのように変貌したか、その理由は何か、という問題はやはり重要な課題である。

前述の如く、極めて概括的な把握によれば、頭中将の人物像は落標巻ないし絵合巻以後顕著な変貌を遂げてきている。そしてその変貌の様相を端的に表現すれば、「好色者」から「政治家」への変貌である。源氏に対する激しい対抗心が彼の人物像の基調なのであるが、落標巻以後それは一貫して政治的権力斗争の形となつて表われてきている。色好みという遊びの世界での競争者は同時に親友同志でもあり得るのだが、権勢を競つ両者の関係はもはや敵対関係であつて伊藤氏の評言を借りて言えば、「かつて無二の親友として心を許し合ひ、流寓の地をも見舞つた頭中将——源氏の間柄が、いまや互にひそかに策を張り合う、冷たい関係に變じてゐる」のである。ここで重要なのは、頭中将像のかかる顕著な変貌の理由である。それについて森一郎氏は次のように説明される。「この物語の第一部前半における弘徽殿大后一派がまさにその敵であつたのだが、今や源氏の須磨からの帰京と共に物語の舞台から姿を消していったのに代つて、権中納言(かつての頭中将)が政治的対立者、すなわち敵側として取り扱われることになつた」⁷⁾また、松尾藤氏は頭中将

の人間像ないし性格設定に著しい矛盾や不合理が見られるとし、その原因について「この人物に、源氏の協力者と競合者の一人二役を背負わせながら、なお脇役としての比重の軽さを堅持させることの困難さから、つい免れ得なかつた性格矛盾の露呈、つまりは作者の意識的又は無意識的な手落ちと見なすべきなのであろう」と論及されている。⁶⁾ いずれも示唆に富んだ高説なのであるが、私は視点を變えてこの問題を考察してみたい。今少し作品の内部に立ち入って分析を続けよう。人物像の變貌といひ、物語世界の變容といひ、濡標巻以後における顕著な政治性は否めない。当の源氏自身がにわか政治的策謀家としての風貌を示しはじめ、藤壺中宮もまた然りである。前齊宮の入内計画は一面において権力への志向をはじめた二人の共同謀議とさえ見てとられるのである。事実、冷泉帝の即位を契機として源氏の権勢は拡大強化の一途を辿り、遂には太上天皇に準せられるのである（藤裏葉）。頭中将の「政治者」への變貌もこうした文脈の裡に語られるのであるから、作者の作中人物造型法はきわめて理にかなつたものであるとも言えよう。しかし、光源氏の人物像がここで本質的に變化したことに対応して頭中将のそれにも必然的に變貌を遂げたとする一般的な見解に対して、私は全面的には賛同できない。光源氏像はその本質においては殆ど變化していないとするのが私の見方である。源氏に対応する頭中将の人物像が著しく變貌するとき、両者の關係はいっそう複雑化し問題性をはらんでこざるを得ない。たとえば、前齊宮の入内をめぐる源氏と権中納言との対立は、まぎれもなく政治的権力をめぐつての確執として描かれている。しかし、注意すべきはその前承部における源氏と女た

ちとの情感こまやかな「色好み」の場面描写である。その中でも特に見過ごせないのは、臨終の床にある六條御息所の長い会話であり、そこで彼女は自らの死後一人とり残される娘前齊宮の身を案じその後見を切々と源氏に依頼する。その涙の哀訴は彼女の外界によつて遺言となつて源氏の心底に刻みつけられる。御息所と前齊宮に対する愛の証しとして源氏はその遺言をまもるのであつて、この場面を承けての入内計画実行の場面展開であることは重要な点である。すなわち源氏の思惟と行動の全ては本質的には「好色者」としてのカテゴリに属しているのであつて、政治的な領域のものではない。前齊宮の入内によつて生じる政治的現実的情況の變化は当然予想されるものではあつても、それは、源氏の「色好み」に自明的に約束される結果として読者に了解されるような文體になつていくことに注目すべきである。問題はむしろ源氏の脇役権中納言の側にある。彼は源氏の思惟や行動を全て「政治」のカテゴリにおいて受けとめる。源氏と権中納言との対立はあたかも政治的確執であるかの如き印象を与へはするが、両者の対立は嚴密には「好色者」と「政治者」の対立にほかならず、さらに嚴密にはそれは対立ではなく隔絶である。絵合わせの場面における両者の言動はそのことを端的に物語っている。「我、人に劣りなむや」と對抗意識を燃やす権中納言ではあつても、絵合わせという「みやび」は本来彼自身の領分ではない。勝敗は既に自明的である。源氏が須磨に退居中描き集めていた「あはれに、おもしろい」絵日記によつて源氏方の勝利が決せられたのも象徴的である。さらに、絵合巻末に、宴の後の源氏と権中納言の心中描写を見るが、私はこの場面における両者の心中

世界の異質ないし隔絶は決定的なものに描写されていると考える。「権中納言は、猶、おぼえ、おさるべきにやと、心やましう思さるべかめり。うへの御心ざしは、もとより、おぼししみにければ、猶、こまやかにおぼししめたる様を、人知れず見たてまつり知り給ひてぞ、頼もしく、さりともとおぼされける。(中略)おとゞぞ、猶、常なきものに世を思して、いま少し、おとなびおほしますと、見たてまつりて、猶、世を背きなんと、深く思はずかめる」無惨な敗北を喫してなお権勢への執念を燃やす権中納言と栄達の極に至ってなお現世を無常と観じて出家を思念する源氏とのあまりにも大きい隔絶である。ここでの両者も究極的な意味において「好色者」と「政治家」の異質な世界を暗示していると見てさしつかえない。両者はこの物語世界を形成する二つの対立契機であり、後者は常に前者に対する敗者であり、劣者である。乙女巻における雲井雁の物語も、東宮妃をめぐる後宮政策の交錯が物語の起点とはなっているが、本文はそのような政治的確執の描写を主体とはせず、夕霧と雲井雁の清純無垢な若い恋の美しさとそれを禁じようとする内大臣の頑固なふるまいとのリアルな描出を中心として展開している。この巻においても、この挿話をはさむ前後の描写に注目したい。巻頭に近い部分で、本文は夕霧の元服とそれに続く大学入學のことを叙している。その中で源氏が父として夕霧に対する教育方針をどう定めているかを祖母大宮に披露している条がある。今本文の引用は省くが、その要点は、源氏自身宮廷に育ちながら本格的に學問を修めなかつたことの反省、身分の高い家の子弟は學問を怠り時の勢にまかせて高位高官に昇ることもあるが必ず末の世には衰えること、學問

を根柢にしてこそ世才や良識も真に生かされるものであること、そういう教育観に基いて夕霧を六位に留めて大学に学ばせることなどである。こういう源氏の考え方はいうまでもなく作者自身の學問観、人生観にほかならないし、さらに権勢抗争にあけられるような当時の貴族政治界の矛盾や虚偽に対する作者の批判であったことも確かである。そして、學問や教育あるいは社会や人間についての源氏のこのような高い見識が大宮や右大将(「頭中将」)にとつて「あさましきこと」としてとうてい承認できるものでなく、当の夕霧さえも「かく苦しからでも、高き位にのぼり、世に用ひらるゝ人は、なくやはある」(乙女)と不満であったにもかかわらず、自己の信条を貫いて動じない源氏の嚴父としての人物像が強調されている。夕霧の教育をめぐる源氏と右大将の見解の相異は単にそれだけの問題にとどまるものではなく、深く人生観、世界観の相異に根ざしたものとして作者は提示しているのである。この条に続く雲井雁事件における内大臣の父親像が源氏の示すそれとかわだつて対照的なもの、このような文脈を辿るためなのである。さらにまた、同巻巻末には自然と人事の調和美を完成した六條院造宮の場面が華麗な文体によつて描写されるが、その主宰者である源氏は言うまでもなく「好色者」としての理想像を象徴している。

こうして、理想的な「好色者」として完成される光源氏像造型の文脈において挿話的に物語られる雲井雁事件の政治的要因は、源氏の内面世界とは本質的にはほとんど交渉をもち得ない未節事に過ぎない。この物語の主題が追求する「色好み」の世界を原点として、源氏と内大臣とがいかに異質な存在として座標を異にする人物であ

るかを作者は対照描法の裡に形象化するのみである。ここでもまた勝者・優者としての源氏に対して、敗者・劣者としての内大臣の人物像はいっそう明瞭である。

近江君物語における源氏と内大臣の關係について見ても事情はほとんど変わらぬ。物語の基本的構造としては、玉鬘と近江君の對抗という作形で露呈された源氏と内大臣の相も変らぬ對抗劇なのであるが、作者の関心はむしろこの物語にはめずらしい喜劇的女性近江君の人物造型に集中している感がある。知性も教養もない型破りの女近江君の人物造型が進めば進むほど、それに正比例して内大臣の人物像も負相を増大して戯面化されていくのであって、文中に源氏の内大臣に対する否定的批判的言辭がしきりに叙せられることによってそのことは決定的である。源氏がにわか内大臣批判を強くする心理的原因としては、第一には夕霧と雲井雁の恋仲を内大臣が強引に裂いたことから受けた源氏の屈辱感がある。「中将を、いたくはしたなめて、わびさせ給ふつらさを、おぼしあまりて」（常夏）源氏は内大臣をこと更に悪評するからである。しかしさらに重視すべきは内大臣の性格そのものの欠点として、「深き心をも尋ねず」（篝火）「まことにしみて、深きところはなき」（野分）「何事につけても、きはくしう」（行幸）する傾向を源氏がくり返し強調している点である。言うまでもないが、それは養女玉鬘の妻父が内大臣自身であることを秘したまま、しかも玉鬘に対して源氏は恋慕の情を日々につのらせていたことと関わってくる。すなわち、源氏の「色好み」を正當に理解する深さも適切に対応する広さも持たない内大臣の性格に対する批判である。この源氏の世界は、「よき

悪しきのけぢめにて」「思ひぐまなく、けぎやかなる御もてなし」（行幸）を一義とする内大臣に共有されるものでなかったことは従前の物語形象に明白なところである。源氏が玉鬘の身上に関する真相を告げ事態の円満な解決を計るためには、往年の古きよき友情の想い出からはじまる長い会話が必要だった（行幸）。その對話における源氏と内大臣には、互に「好色者」として睦みあつた往時の絆が回復されているとも言えるであろう。それ以後の物語展開が、太上天皇に準ぜられる源氏や太政大臣に昇進する彼の政治的情況をも忘れていないとしても、源氏の「色好み」世界の大団円へと急速に進行する過程にほかならないことは詳述するまでもない。

以上、濡標巻以降における源氏と頭中将の關係を中心に、人物像における変化の相あるいは不変の相をとらえてきたのであるが、端的に言えば、源氏は物語の進行に伴ってますます「好色者」としての理想像に近づき、頭中将はいっそう「政治家」としての人間像を確かなものにしてくるのであって、両者は主役・脇役という密接な關係にありながらも、本質的にはますます隔絶するばかりなのである。それは源氏の「色好み」の世界を強調するための対偶法とでも呼ぶべき人物造型の方法なのであるが、頭中将の人物造型を通して試みられた物語世界内への政治的投射は、源氏物語の場合さらに微妙に屈折しているようである。何故なら、これまでにもしばしば「女のまねぶ事にしあらねば、この片端だに、かたはら痛し」（賢木）主旨を述べて、政治に関する物語を極度に回避してきたこの物語の作者にとって、政治を新たにとり込もうとする方法はさほど単純なものではあり得ないはずだからである。私はいま、この問題を頭中将

の人物造型との関わりにおいて考及しておきたい。

四

既述のように、光源氏像の本質は「好色者」であり、頭中将像の本質は「政治家」である。この物語の作者は、前者を主題の中心において後者をその脇役としての位相に設定した。脇役は常に主役に対する劣者であり、敗者でしかあり得ない。頭中将はそのように正確に造型されている。ただ、彼の人物像にはたえず戯画的側面がつきまとっている。それが脇役の彼には不可避的要因だったと言ってしまうばそれまでであるが、頭中将の場合には特に吟味が必要だと私には思われる。

私はさきに、頭中将は光源氏の内面世界である「色好み」の世界の理解者たり得なかつたことを指摘したが、このことをより端的に説明するにはさらに有効な事実がある。冷泉帝の誕生に関わる源氏と藤壺中宮との密事について彼は何も知らされない人物だという点である。濡標巻に冷泉帝の即位が叙せられている。源氏一門の政治的繁栄はこの日からはじまった。頭中将の権勢も源氏の栄達の威光によってにわかになくなった。冷泉帝を頂点とする源氏一門・左大臣家一門の繁栄は輝くばかりであるが、源氏にとってそれは内に深く隠くされている藤壺との密事が外界に映し出す虚像にほかならなかった。絵合巻巻末において、「いみじき盛りの御世」のさ中にある源氏が「世を背きなん」と思惟する所以である。ここで、冷泉帝の出生の秘密について何も知らされない頭中将は、つまりは光源氏の内面世界について本質的には何も知らないのと同然である。しか

もその彼が冷泉帝の威光をいただきながら政治的に源氏と対抗しようとする有様は、真相を知り尽くしている読者の目には自ずから戯画中の人物のそれと写るわけである。頭中将はまた、源氏と多くの女性たち——たとえば六條御息所・末摘花・紫上・前斎宮・玉鬘などとの交渉についてもその過去の深い情交の歴史についてはほとんど何も知らされないまま、単に表面においてのみそれを知りそれ以上知ろうとも努力していない。彼が源氏から「深き心をも尋ねず」とか「思ひぐまなし」と人物批判を受ける所以である。

要するに、頭中将は光源氏の内面世界について何も理解し得ない人物として設定されるところに、その戯画的人物像の造型が果たされていくのである。それにしても、この物語の作者は何故そういう頭中将を源氏の脇役として設定し、しかも彼に政治的人物像を賦与していったのであろうか。

思うに、この物語の主題は理想的主人公光源氏の「色好み」の世界の追求にあったことは確実である。主人公が理想的かつ完全無欠な人物であることは古代物語の一般型式が要請する公理でもあったが、それはまた物語内における予言とその実現という型式で充たされるのが定型でもあった。光源氏の理想性と運命の予言は早くこの物語の発端桐壺巻で告知され、さらに若紫巻における夢告げや濡標巻における宿曜師の予言で補強されていた。源氏はただ自動的にその運命の軌跡を辿るだけであるが、それが政治と関わる世界に涉るために、男性人物の脇役を必要としたのであろう。作者は、光源氏の理想性を顕わす「色好み」の世界に多くの女性を脇役として登場させ、「政治」の世界に男性の脇役を配して、その全体像を造型し

たと考えられる。その場合、この物語の作者はおそらく当時の貴族政治界の裏側を後宮の窓を通してつぶさに見聞していたであろう故に、それに対する強い批判意識も抱いていたが、女が口にするべきではないとされた政治上の問題を敢えて物語世界内に領導する視点に頭中将を造型しはじめるとき、それは戯画化という擬装をとって営まれるほかなかったのであろう。こうして、頭中将なる人物は光源氏の政治栄達を証言する謀体としての重い役割を荷うと同時に、時代や社会に対する作者の懷疑と批判とを仮託されるという今一つの役割の故に、このように奇妙な相貌を帯びて造型されたのであるまいか。そのことによつてはじめて彼はこの物語の主題とも関わり得たのであつて、また彼が光源氏の最も重要な脇役であり得ているのもそれによつていたのである。やがて物語が若菜巻に入つて源氏の「色好み」の世界の内部矛盾によつて六條院が自己崩壊をはじめるとき、作者の主題意識から政治の世界が急速に遠ざかつていったのであろう。源氏対頭中将という対偶の型式は今夕霧対柏木という新しい対偶型式に変化し、物語の主題もまた新しい展開を示すことになる。彼は既に脇役ではなく一人の端役である。

頭中将をめぐる課題は、あるいは源氏物語における文学と政治の関わりの問題として追求されるのかも知れない。そういう巨視的立場からのアプローチも私にとつて関心の強いところであるが、その考察は別の機会に譲りたい。

注(1)多くの頭中将論は、しばしば光源氏論の中に埋没する形で行なわれている。独立させて扱ったものに、早坂礼吾氏「源氏と頭中

頭中将論 — その人物像の変貌と主題との関連性 —

将 — その対立と和解 —」(「国文学」昭34・8) や松尾聡氏「頭中将」(「源氏物語講座第三巻」昭46・7) などがある。前者は過大評価の、後者は過小評価の傾向にあると見られよう。

(2) 稻賀敬二先生のご示唆による。

(3) 沢田正子氏「脇役の人々」(「解釈と鑑賞」昭46・5)

(4) 伊藤博氏「濤標以後 — 光源氏の変貌 —」(「日本文学」昭40・6)

(5) 森一郎氏「源氏物語の方法 — 絵合巻をめぐる —」(「源氏物語の方法」八桜楓社刊▽昭44・6、所収)

(6) (5)に同じ。

(7) (5)に同じ。

(8) (1)の松尾氏のご論文による。

(9) 今井源衛氏「政治と人間」(「国文学」昭46・6) 参照。

本文の引用には日本古典文学大系本を用いた。

追記

本稿をなすにあたって、稻賀敬二先生に多大のご教唆をいただいた。記して謝意を表する。

(昭49・9稿)